

林真理子『小説 8050』—生き直す父子の物語

小林美恵子*

On "Shousetsu 8050" by HAYASHI Mariko: A Story of a Father and Son Rebuilding Their Lives

KOBAYASHI Mieko*

Key Words: Father, Son, "Hikikomori", Family, Rebuilding

1. はじめに

平成の期間に、政治・経済・文化とあらゆる面で目まぐるしく時代が変容したことは、同時代を生きた人々が共有する思いに違いない。家族という集団の在り方、概念にも激変がもたらされた。親は叱るもの、子供は反抗するもの、学校にいじめっ子は必ずいて、それでも大方の人々は無事に大人になり、職場や家庭が持てた。どうにかなるさ、は昭和という時代の力強さを物語る昔懐かしい言葉になったと言えよう。バブル経済の崩壊・非正規雇用の増加と雇止め・格差の顕在化等様々な要因は人々の日常生活に影響を落とし、ネット上の〈つながり〉が活発化する一方で隣人との関係は希薄になり、企業や学校で心を病む人々を増加させていった。人情や友情、近所づきあいといった直接的な人の繋がりは激減し、孤立を深める中で社会参加不能な人々を次々と生ぜしめ、現在に至っている。「ひきこもり」と呼ばれる人々が増加していったのも、このような社会の推移と連動していたように思われる。

国の定めた定義によれば、「ひきこもり」とは「様々な要因の結果として、社会的参加を回避し、原則的には六カ月以上にわたっておおむね家庭内にとどまり続けている状態を指す現象概念」(平成三十年度厚生労働白書)を指すという。平成三十一年に内閣府が初の四十代以上のひきこもり調査結果を発表し、四十～六十四歳の「中高年ひきこもり」が、推計で約六一三,〇〇〇人、ひきこもり期間七年以上の者が約半数を占めていることを明らかにし、社会に大きな衝撃を与えた。

「何よりも社会に衝撃を与えたのは、61 万人という数字だけではなく、15 歳から 39 歳までの「若者」のひきこもりの推計人数 54 万 1000 人を、40 代以上が上回ったことだ。ひきこもりの長期化、当事者の高齢化という事実が、改めて社会に突き付けられたことになった」(黒川祥子『8050 問題 中高年ひきこもり、七つの家族の再生物語』新潮社、令和元年十一月)

働かなければ生活が立ち行かなくなるのが世の理であるが、彼らが生き延びられているのは家族の保護下にあるからであり、ひきこもった子供の面倒をエンドレスに見続けねばならない親たちは、豊かな経済力を備えていようがわずかな年金で暮らしていようが、子供の保護という義務から逃れられない点では同等の苦しみを味わっている。

この社会的関心事を小説にしたのが林真理子『小説 8050』(『週刊新潮』令和二年二月二十七日号～十一月五日号)である。令和三年四月三十日に新潮社から単行本化された後、二か月後の六月二十五日には七刷に達しているところからも、反響の大きさがうかがえる。林がここで描いているのは、ひきこもりの若者が立ち直るまでのプロセスであり、見ようによってはひきこもりの家族を抱える人々への解決マニュアル本のようにも読める。が、この作品は一貫して父親正樹の視点で語られる〈父の物語〉であり、父の人生をかけて息子を再生させようとする父子の物語である。父正樹の歩みと、息子翔太の挫折はどのように関連し、正樹は自身の人生という物語をどう展開させようとしているのか。それは家族の物語でもあり、家族というものの姿が大きく形を変えようとしている令和初頭の今、一つの答えを投げかけてくれるはずである。

2. 大澤家の人々

大澤家は歯科医の正樹、専業主婦の妻節子、長女の由依、五歳下の長男翔太の四人家族である。大澤歯科は正樹の父の代からの地元に着した医院だが、昨今の少子化と口腔衛生教育の浸透、歯科医院の乱立のせいで経営は先細っている。その影響が、この家の長男翔太の教育計画にも強く反映された。歯科医ではなく、医者にならなければという強い危機感を抱いた正樹夫婦は、翔太に医学部受験をさせることを心に決め、そのために中高一貫校への受験に臨むこ

* 教養科 Division of Liberal Arts

とになる。有名私立中学校に進学した翔太は、しかし二年生のある日を境に「もう学校に行きたくない」と言い出し、以後二十歳を迎えた現在に至るまで七年間、自室に引きこもる生活を続けている。

自宅と医院を兼ねている大澤家の家屋は三階建てで、一階が診療室、二階がダイニング等家族の生活ゾーン、三階が子供達二人のフロアとなっている。姉の由依が就職して家を出てからは、その空き部屋が納戸になっているほかは翔太が一人で使っており、家族と接触しないでひきこもるには絶好の環境となっている。

夜の十二時過ぎ、家族が寝静まった頃起きてくる。そして冷蔵庫の中から麦茶や牛乳を出して飲み、節子のつくっておいした食事をむしゃむしゃ食べる。風呂に入る、洗濯をする、そしてまた自分の部屋に戻り、パソコンであれこれ見たり、ゲームをする。家族が起き出す頃には息を潜め、トイレに行くとき以外はまず出てこない。昼過ぎに節子が、簡単な食べ物を載せた盆を置いておく。それを食べて夕方眠りにつくらしい。つくらしいというのは、部屋の中での生活を家族の誰もが把握していないからだ。(第一章 はじまり)

このように描写される翔太の毎日は、典型的なひきこもりの日常としてすでによく知られているものである。第三者の目から見れば不健康で異常な生活状況であり、またそんな当人に食事を差し出すような保護者の姿勢ははなはだ生ぬるいものに違いなく、なぜ毅然とした態度で生活を正さないのかと腹立たしい疑問を抱くのが普通であろう。

むろん、これも親の通る典型的な経路として、正樹は息子を叱り、殴り、力づくで部屋から出そうとし、母の節子が泣いてそれを止め、最後は「お前の育て方がいけないんだ」という正樹の言葉で終わるとい一幕が繰り返された。夫に責められた節子は心療内科に通院するほど精神的痛手を負っているが、それでも翔太がひきこもっている限り、節子は決して翔太の世話を辞めることはないだろう。七年どころか、十年、二十年、何十年でも夫婦は息子がいつか部屋から出てくる日が来ると信じ、異常な毎日を日常化させながら年月を経っていくに違いない。このようにしていつしか子供は中年と呼ばれる年齢に達してしまい、親は死期を間近にした老齢に差し掛かっていくのが「8050」という数字で示される社会現象である。翔太がひきこもってから七年目という比較的早い時期に正樹と節子が立ち上がったのは、翔太の五つ年上の姉、由依の結婚話が浮上したからであった。

由依は中高一貫の名門女子校に学び、現役で早稲田大学

の政経学部に入學、女子ながらエリートコースを進んで大手損保会社に就職している。最近になって、同じ会社の二つ年上の恋人・野口との結婚話が具体化していた。相手は一橋大学卒、父親は商社の役員、祖父は元国会議員という家柄の一人息子である。申し分のないこの恋人と結婚するのに、七年にも渡るひきこもりの弟がいては差し障るという由依の事情が、大澤家を動かざるを得ない状況に追い込んだ。「もちろん私は、いつかは話すつもりなのよ。だけどね、努力している、改善しようとしている、って姿勢は見せたいと思っている。だってそうでしょう。あちらのご両親に、今までどうしてたの、ずいぶん長い間ほっておいたのね、という印象を持たれるのは嫌なのよ。どこのうちだってマイナスはあるわ。だけどね、そのマイナスをほったらかしにしているうちってやっぱり軽蔑されると思うの。」由依のこの考えに従い、大澤夫婦は彼女が探してきた「KIGARU 塾」という、ひきこもりの青年を対象とする私塾に頼るという選択をする。

それまでも、正樹と節子は外部の力に頼って来たことがあった。カウンセラーやNPOの手を借りようとしたこともあったが、翔太に変化をもたらすことはなかった。

「KIGARU 塾」に一家が賭けようとしたのは、「驚くべき就学復帰率」を誇り、費用が高額である分、正樹には「ひきこもり支援は、確かにビジネス化してシステムティックになっている」と映り、「立ち直りの方法が明確に多様化してきた」ことを期待させたからであった。

翔太が初めて親に暴力をふるったのは、この「KIGARU 塾」から、迎えの人々が来訪した日のことだ。家から追い出される気配を察知した翔太は、スタッフの人々をうまくごまかして返した後、両親に対して罵声を浴びせ、節子に向かって繰り返し椅子をふりおろし、止めに入った正樹とつかみ合いの修羅場を繰り広げた。この出来事は、夫婦にこれまでにない大きな打撃を与える。が、一方ではこの破滅的な事態が、問題の核を明るみにするチャンスを作ることにもなった。

「いったい何なんだ!? 何がお前をここまでさせるんだ!?」/「復讐だ!」/翔太はわめいた。/「オレはただ復讐したいんだよ!」/「復讐」/翔太は確かに今、そう言った。/それはいったい誰に対してのものなのか。復讐を考えながら、こうして親に乱暴を働いたということは、親に向けてのものなのか。(第一章 はじまり 傍線部引用者、以下同じ)

これまでの一家は、翔太自身も家族との対話を避け、正樹や節子も翔太のひきこもりの原因がわからないまま放

置し、長女の結婚だけは無事に済ませて送り出したいという気持ちが先行して外部の手にゆだねようとしただけであつた。が、この日の翔太の尋常ならざる反応に、ようやく正樹は息子の心の奥に〈何か〉が存在していることに目を向け始める。

3. 七年目の事実

子供が学校に行けなくなれば、親はまずいじめを疑う。これは不登校という言葉とセットになっていると言ってもいい。正樹や節子も、七年前に当然学校に問い合わせたが、担任や校長の回答は年4回のアンケート調査とカウンセリング体制を根拠に「この学校にいじめはない」というもので、翔太に親しい友人が乏しかったせいもあって、それ以上の訴えを諦めざるを得なかった。が、この時に翔太は十三歳ながら、懸命に両親に訴えてはいたのだった。

「とにかく、もう二度と、あいつらのいるところに行きたくはない」／「あいつら、って誰なの？ 言いなさい。はっきり言うのよ！」／という母親の声は無視して、翔太は立ち上がった。／「とにかく僕は行かないよ。ママがもしー」／そこで言葉を区切った。／「もし僕を無理やり行かそうとするなら、僕はママを許さない。本当だよ」(第一章 はじまり)

これだけははっきりとした訴えを聴きながら、当時の大澤夫婦には、この息子の言葉を手掛かりに問題解決に向かうことはできなかった。翔太の学校は私立の名門校であるがゆえにガードが固く、不祥事の事実を認めさせることは容易でない。

既に独立して家を離れている由依は、両親に対して時に他人のような冷淡さで、より厳しい弟への処遇を進言する。自身の結婚の行方も絡んでいるので、必死にならざるを得ない彼女には、情け容赦のない冷徹さも感じられるが、しかし大澤家の内部に強引に新しい風を吹き入れるのには高い効果を発揮する。

結婚相手の野口と大澤夫婦との挨拶も何とか済ませ、婚礼に向けて順調にスケジュールが動き出したやに見えたある日、ふいに大澤家を訪ねてきた野口とその母親に対し、翔太はガラス窓を次々と割り破るという暴れ方をし、ついにパトカーの出動を要請する事態となった。

当然のことながら野口家は仰天し、破談の危機に立たされた由依は、泣きはらした顔で、弟を精神科の施設に閉じ込めてほしいと両親に懇願した。「もし結婚できなければ、私がいつか自殺するかも」という由依のつぶやきは夫婦を震え上がらせる。由依は具体的にある業者を探し出し、五

百万円という大金を投じてでも弟を施設へ入所させてほしいと強硬に提案した。正樹は新聞記事を調べたりすることで、そこに解決の道が開けるのか否かを模索するが、結果は暗澹たるものだった。「ホープ移送サービス」という名のその業者は暴れて抵抗する人間でも確実に家から連れ出して施設に送り込んでくれるが、入所先は完全な監禁施設であり、入所者はスマホを取り上げられて連絡手段を断たれ、おむつをされて脱水症状で逃げ出した人もいたという。娘からそんな施設に弟を預ける提案をされたことで、家庭の崩壊をまざまざと実感した正樹は、息子に病院で治療を受けることを勧め、さもなくば業者に依頼するしかないという現実を、開かない息子の部屋の扉に向かい、泣きながら語りかけた。

「おい、翔太、聞いているのか。このまま返事がなかったら、父さんは二十四時間いつでもオッケーとかいう業者に電話をかける。さあ、どうなんだ。はっきりしてくれ。お前はいつも肝心なことは言わない。だがな、もう静かに暮らせる時は終わったんだ…。」

(第二章 苦悩)

父親からの最後通牒ともとれるこの言葉を聞かされ、ようやく扉を開けて出てきた翔太は「どんな親切な医者だって真実は話さない」と答え、「本当のことを言ってみろ」と迫る正樹に口を閉ざす。

受けていたいじめに関して翔太が口を閉ざすのは、その内容の残酷さ、卑劣さへの怒り、学校も親も頼りにならなかったという挫折感、無力感、悔しさ等が内面で渦を巻き、出口を見失っているものと思われる。十三歳の少年に、自身の受けた破滅的な経験を語る言葉があるとは考えられず、しかも学校という大きな組織に阻まれて親も事実が把握できない中、誰にも真実を理解されない境遇では、自分の部屋を砦にして立てこもるしか生きる道はあるまい。

はじめて翔太が母親に椅子を振り上げた日、彼の口から「復讐したい」という言葉を聞いた後、正樹は七年前に翔太と一緒に受験して同じ私立中学校に入学した堀内という青年を尋ねていた。関わり合いになるのを嫌って警戒する堀内は、すべてを語ってくれたわけではなかったが、この日正樹は、翔太が頻繁に呼び出される、首を絞められるといったいじめの果てに、二階のベランダから逆さ吊りにされたこと、ズボンを下ろされて写真を撮られたこと、それを近隣の名門女子校に送られていたこと、ゴミの焼却炉に鍵をかけられ何時間も閉じ込められたことを知らされる。既に加害者の中学生たちは、有名大学に進学し、前途有望な青春を送っているという。堀内は、自分たちが通っていた学校が「勉強をぎゅうぎゅうさせるから、生徒はも

のすごくストレスがたまること、そのはげ口にされた翔太について「へたなこと証言すると高等部へ進学できなくなる」ので証言できなかったこと、そして「十四歳とか十五歳とかだと、善悪の境いめがぼやけている」ために、罪悪感などいささかも持ち合わせておらず、大人になれば全て忘れてしまうのだから、今さら謝らせることは不可能であり、裁判で人生をかき乱すようなことをする権利はないと語り、加害者の名前を求める正樹に難色を示した。この事実を把握した時期と、由依の結婚話が具体化した時期が重なってしまい、堀内から情報を得たまま今日まで来てしまっていたが、正樹はこの晩、口ごもる翔太に対し、「お前、復讐をしろ」と言い放つ。移送業者のために用意した五百万円を弁護士費用に充て、父子で復讐に立ち上がろうと決起を促した。翔太は加害者たちを「いつも、どうやって殺そうかって、考えてる」と告白し、正樹は息子が「犯罪者」になる覚悟を固め、着々とその日のための準備をしていたことを知る。

その後の正樹は、反対する節子を尻目に、いじめ裁判に対応してくれる弁護士探しを開始する。最初に訪れた弁護士は、いじめに対する社会の認識が厳しいものに変ったために、いじめた同級生を訴えることは「出来る」こと、精神的なダメージが現在も続いているなら時効は成立していないことを教えてくれ、いまさら訴えることは不可能ではないかと訝る正樹を勇気づけた。結果的にこの弁護士は、正樹たち保護者が翔太に治療を受けさせていないことや学校から証拠を得ることが難しいことがわかると、裁判は無理とあつけなく匙を投げてしまった。が、その時の顛末を節子が友人の奈津子に LINE で嘆いたことで、翔太の人生に決定的な転機をもたらす次の弁護士との出会いがもたらされる。

4. 戦闘開始

その弁護士は高井守と言い、奈津子の息子の友人の兄で、息子の通った「バカばかりが行く」高校の同窓生であるという。奮起して弁護士資格を得た後は、大澤家の属するような上流階級を相手にするよりも、出身校の卒業生たちからのいわば下世話な問題の世話を焼くことが多く、「いじめられた子どもに替わって学校に乗り込んでいくこともある」という情報が、裁判に消極的だった節子の心を捉えた。正樹と節子が高井を尋ねると、高井はすぐに行動を開始する。高井の方針は、裁判には勝つ必要はなく、親が自分のために闘ってくれたという姿を見せることや引きこもっている自分ではなくいじめた相手が悪いことを世間に示すことで十分であるというものであった。そして、すぐに翔太に会う必要があると言い、翌日大澤家にやって

きた。

ドアの外から翔太に自己紹介の声をかけた後、高井は自信に満ちて翔太が降りてくるのを二階で待ち構えた。正樹も節子も全く期待していなかったが、程なく翔太は姿を現した。高井の「翔太君、君がこのまま黙ってしまったらそれっきりなんだ。君が君を味方にしないと、他に誰もいないんだよ」という言葉が翔太の耳に響いたのだろうか。日頃から、身近な人々の差し迫った問題解決に当たっているためか、高井の言葉には直截的に聞く者を動かす力を持つ。翔太はこの日のうちに、おそらくこの七年間、誰にも明かせなかった加害少年三名の名前をメールで高井に打ち明けた。

この後、高井は正樹が七年前、学校の頑なな防御に阻まれて諦めた事実確認という壁を次々と打ち破っていく。正樹はそれを目の当たりにしながら、それをしなかった自分への後悔に苛まれる。高井は翔太に「三人でチームを組んだ」と鼓舞する言葉を投げかけ、正樹には「これからは翔太君を出来る限り調査に参加させてください」と指示をした。そして、裁判のための証拠集めの調査は、正樹の手にゆだねられる。高井が重視したのは、翔太の下半身の写真の画像を送られた女子校の元生徒から証拠画像を得ること、そして焼却炉から翔太を助け出した事務員の男性から証言を得ることだった。果たして正樹は懸命に細い糸を手繰るようにしてこの二件の調査に奔走し、見事に結果を手に入れる。

堀内から三人の加害者のうちの一人、寺本航の居所を聞き出せたことも大きかった。寺本は、翔太が学校を去った後、翔太の代わりにいじめられた少年で、その後学校をやめ、家を出てバーで働いていた。寺本からの証言は、裁判で大きな力になる。寺本は、一度は正樹や翔太に協力的な姿勢を見せたが、身分を隠したチャットルームで翔太に近づき、裁判を取りやめさせることを目論み、誘き出したバーで危うく翔太に刺されそうな目にも遭う。

高井と正樹、そして翔太の「チーム」が手に入れた成果は、まず七年前に翔太の下半身の画像が送りつけられた相手の女子校生・田村梨花を見つけ出し、しかも彼女から当時、その画像を見て明らかにいじめと認識したことを証言してくれるという約束を取り付けたことだった。現在アメリカに留学しているという彼女は、現地で人種差別的な扱いを受けた経験から〈人間の尊厳〉について考えるようになり、かつて翔太の画像を見て痛ましく思いながら、何の行動もとらなかったことを悔やんでいるという。「私の過去をやり直せるチャンスをくださったことに感謝します」というメールの文面は、正樹の目に涙を溢れさせるに余りあるものであった。焼却炉から翔太を救い出してくれ

た用務員・益田好之の日記には、二時間位も焼却炉に閉じ込められ、恐怖と脱水症状からぐったりし、失禁もしていた翔太を助けたこと、それを担任の教師に通報していたこと、それなのにこの一件は保護者にも知らされなかったことが記録されていた。最近になって高井と一緒に学校を訪れた時にも、この担任はいじめはなかったの一点張りで押し通し、そのことを思い出した正樹は嗚咽を漏らさずにはいられなかった。

様々なプロセスを経て、兎にも角にも正樹と翔太は裁判にこぎつけることが出来た。当初、法廷に立つことのために見せた翔太も、高井とのやり取りの中で裁判のやり方に関心を寄せ、また自身の持っている七年前の証拠画像を送るなど、積極的な行動を見せるようになっていった。翔太の無念を晴らし、人生を取り戻させるための裁判に父子が力を漲らせていく中、それに逆行するように不気味な静けさを見せているのが母の節子だった。

5. 夫婦の崩壊

節子は女子大を卒業後、大手自動車メーカーの秘書室に勤務し、上司が正樹の父親の親友と同級生という縁で、正樹と見合い結婚している。正樹の歯科医院は今でこそ先細りの経営状態だが、父の代からの貯えもあって、節子がパートに出るような必要はなく、二人の子供たちは塾通いを経て、私立の中高一貫校に入学させられた。

由依が弟より五つ年上の二十五歳、正樹や節子が若かったころの平均的な男性の結婚年齢を二十代後半と考えると、現在の正樹の年齢は五十代半ばと思われ、妻の節子もそう離れていないだろう。おそらく昭和四十年代に生まれ、バブル期真っ盛りの昭和六十年代に大学生活を送っていた人々と思われる。女性は〈寿退社〉から専業主婦になるのが幸せの典型であり、相手の男性には三高と称する高学歴・高収入・高身長が理想の条件などとされていた。見合いという出会い方からしても、大澤夫妻には恋愛という感情は芽生えにくかっただろう。それは正樹の発言の端々にも表れている。正樹は節子や子供たちを「お前」と呼び、性別役割分業意識が強く、経済的な責任はきっちり果たす代わりに、家事や子育ては全て妻任せという昭和的な価値観を強く持っている。息子のひきこもりの原因も節子にあると怒鳴りつけ、そのために節子は心療内科に通院するほど体調を崩している。

正樹が高井と出会い、裁判準備を進め始めたとき、翔太は事の重大さに怯え悩み、一度家出をしている。節子が金を渡して、例によって自分の考えだけで裁判に突っ走る夫から逃がしてやったのだった。そもそも裁判については節子は積極的にはなれなかった。夫婦の考えの不一致と言え

ばそこまでだが、正樹は翔太には丁寧な説得に努めているが、節子との意見の一致には努力を払わない。翔太が裁判から逃げざるをえないように追い詰めたことについて、節子から責められると、正樹は「黙れ、黙れ」と大声で妻を遮る。

「あなたはね、いつも自分勝手に行くのに気づかないの？ 決して途中で振り返ってこっちを見たりしないのよ。時間をかけたっていうけど、ちゃんと翔太と話し合ったりしたのかしら」「それは無理だろう。あいつはいつも部屋から出てこないんだから。だけど俺は毎晩話しかけたし、あいつも、裁判をやるっていう意思表示をした」が、それがいつだったのか、急に自信がなくなってしまった。 (第四章 再会)

節子は正樹に対する積年の恨みを次々と噴出させる。翔太が中学校に入った年だから、引きこもる直前の時期と思われるが、その頃正樹の父親は認知症が始まっていたのだが、正樹はそれを認めたがらなかった。既に正樹の母は亡くなっていたので、介護は節子一人の肩にかかっていたが、「大澤先生」と呼ばれて近隣の敬愛を集めていた父をかばい、節子に対して認知症を近所の人たちに気づかれぬようにしろと厳命したりもした。夫婦の罵り合いは日常化し、節子のストレスは頂点に達した。呆けた義父から性的な近づき方をされることもあったが、それを訴えても、正樹は信じようとしなかった。そんなある日、とうとう節子はドライヤーのコードで首を絞めて死のうと思いつめたことがあり、それに気づいた翔太が自分もつらいことを我慢しているから死んじゃダメ、もし死ぬなら自分も一緒に死のうと言ったという。この話に対しても正樹は「中学一年生がそんなことを言うはずがない」と一蹴している。

むろん、正樹にも言い分はあった。父の引退でなじみの患者がごっそり新しいクリニックにとられ、自分でDMを作るなど経営努力を払い、一方では父の入る施設を探し、家を守るために奔走していたのだ。節子は「大澤歯科医院の奥さん」として地元で一目置かれ、経済的にも心配させたことは一度もない、恵まれた妻だったはずだ。今、由依の結婚が決まったら別れたいと離婚を口に出し始めた妻に対し、正樹は「資格を持たない中年の女が、一人で生きていけるはずがないではないか」という侮蔑的な感情を抱いている。

裁判についても、正樹は今立ち上らなければ「8050問題の家」になってしまう、と親子双方の老いを射程に入れて裁判に臨む決意を口にするが、節子はそれも仕方なしと考える。「翔太には拒否する権利がある」し、「あの子には

やりたくない心がある」のだと主張する。夫婦の意見は全くの平行線に終わってしまう。既に節子は正樹と食事を取ることとはなくなり、正樹は診療所の仕事を終えるとラップの掛かった冷えた食事を一人で取り、片づける。

翔太自身が、いよいよ裁判に向かう意志を固めたとき、節子ももう反対はしなかったが、正樹はその節子の表情に、諦念の籠った「覚悟」を読み取った。「三十年にわたり自分が作り上げた家庭の、最終章を見届けたい」という覚悟である。裁判が終わった後に離婚するならば、家屋も手放し、妻と財産を分け、引きこもっている翔太もこの家から出なくてはならなくなる。正樹が節子と共に作り上げたはずの家は、そもそも出来上がってなどいなかったのか。最後になるかもしれない正月の膳を前に、これまで自分のために何くれとなく尽くしてくれているように見えた妻が、内心では離婚を切り出すタイミングを見計らっていたという事実を思い、正樹は妻という人間の恐ろしさを感じていた。

正樹のような夫が、何十年も夫婦生活を送った挙句、老境を前に離婚を切り出されるケースは後を絶たない。彼は彼で懸命に生きてきた。翔太の進学のこと、正樹なりに若い父親として懸命に息子の将来を考えた末の決断だった。将来性の乏しい歯科医よりも医師を目指した方がいい、そのためには進学塾に通って、いい学校に合格する必要がある。これについては、正樹はかなり慎重に翔太の納得を得る努力をしており、翔太もそれに応える覚悟を持って有名中学校に進学したのであった。

節子に責められ、「別れる」という言葉を口にされてから、正樹はよく過去のことを思い出すようになった。翔太がよちよち歩き出した頃からを。／しっかりと抱きしめたことがあったろうか。／泣き止まなかった時に、激しく叱ったことがある。自転車に乗るのを諦めようとした時、「お前、それでも男か」と怒鳴った。倒れても何度も乗せようとした。／ゲーム機を取り上げたのは、宿題をしなかったからだ。／ああした小さなことが積み重なって、やがて大きな出来ごとへとつながったのか。自分はそのほどいけない父親だったのか。(中略)自分はそれほど悪いことをしてきたのか。／自分はいったい何を間違えてきたのだろうか。

(第四章 再会)

この思いは、親になった誰もが持つのではないだろうか。誰もが初めて親になり、経験もないまま必死に子供を育てていく。それはもう、自分の持てる能力のすべてを使い尽くして親であろうとしているに違いない。正樹の場合、引

きこもった翔太のみならず、エリートコースを間違いなく歩いてきた由依に対しても子育ての結果を喜ぶ気持ちにはなれない。野口との結婚を焦る中で由依から出る言葉は計算高く、正樹は混乱する。「幼い時はなめるように可愛がったが、思春期の頃から、あちらも遠ざかり、こちらからも遠ざかっていた。成長し変化する様子を眺めてはいたが、その内部に迫ったことはない。」という言葉には、父親と娘のありがちな距離感を思い浮かべられるが、家族という関係の中で、何とうすら寒いことだろうか。正樹は結婚というものの本質について考えずにはいられない。

結婚というのは一。そう結論づけるのはまだ早いとは思うものの、こう言わざるを得ない。まるで理解し合えない人間と、何十年か一緒に暮らしていくものなのだ。(第四章 再会)

悪気はないが、他人の考えを受け入れられない、自分の思いに反すると、わき目もふらずに相手を罵倒し、傷つける。正樹のこの短所が最悪の形で現れるのが、裁判開始後、四回目の弁論準備手続きを終えた時であった。不気味な余裕を見せていた学校側が、七年前の携帯の画像を提出したが、そこに写っていたのは、同級生を四つんばいにさせて、背中を踏みつけている翔太の姿だった。息子の受けたいじめに涙を流して心を痛めた正樹だからこそ、そんなおぞましい行為を息子もまたしていたという事実、気が動転したに違いない。彼は、無理やりやらされていたものだという翔太の言葉にも周囲の静止にも全く耳を貸すことが出来なくなり、翔太を激しく罵倒した。追い詰められた翔太は、三階の窓から身を躍らせる。

6. 闘いの果てに

息子が自殺を図った。それが俺のせいならば、おそらく責任をとらなくてはならないだろう。何のための責任？息子を追い詰めた責任か。いや、その前に、息子をこれほど弱い人間に育てた自分に責任がある。／失望した、と言った。もうすべておしまいだと言った。その言葉は狂気になったかもしれない。が、どうしてそれほどぐっさりと、心の奥に刺さってしまったのか…。／いや、息子をなじるのは間違っている。すべては自分がいけないのだ。だから翔太がこのまま死ぬのなら、自分も命を絶たなくてはならないだろう…。

(第五章 再生)

翔太は生死を賭けた手術の末に一命を取り留めたが、

脊椎損傷で後遺症が残る可能性があり、一生車椅子の生活を余儀なくされる恐れがあった。手術を待つ間、節子は「もし死んだら、あなたを許さないから」という言葉を繰り返し、「忘れないでね、すべてはあなたのせいなんだからね」「もっと早く別れていればよかったんだわ」と言い捨てた。

節子にいたぶられるまでもなく、正樹はわが身を振り返らずにいられない。「もっと早く、というのは、いったいいつのことだったのか」「両親と同居を始めた頃か。父親の介護をさせた頃か。それとも翔太の不登校が始まった頃か。いずれにしても、節子は何度も離婚を決意していたということか」「自分はそれほど駄目な夫だったのか。たぶんそうなのだろう。自分は父親としても失格だったが、その前に夫としても最低ということか。まるで価値のない人間ではないか……」。

しかし、意識を取り戻した翔太は、父に背を向けはしなかった。高井に対して、裁判の継続を願い出て、リハビリにも懸命に取り組んだ。「どうしてオレが今、車椅子に乗ってここにいるのか。それをどうしてもつきとめたいんだ。」「オレはなにも悪いことをしなかったのに、どうして奴らはオレをあんなに憎んだんだろう。オレはそれを知りたいし、奴らに罰を与えたい。お父さん、裁判をさせてください。お願いします」。大澤家の歴史の中で、一度は節子が死を考え、翔太が自ら命を断とうとし、その結果次第によっては正樹も命を絶つところであった。翔太が一命を取り留めたとはいえ、この先何も残らない正樹が生きていくことは難しかったことだろう。正樹はこの翔太の言葉で命をつなげたが、翔太もまた、父が父の限界の中で、必死に自分を愛したことを悟ったのではないだろうか。不器用に失敗を重ねる正樹の前で、翔太の言葉は父を癒す慈愛に満ちているといえよう。こうして父子は再び裁判に立ち向かう。

裁判の最終段階となる証人尋問は、原告側被告側双方の弁護士による激しい攻防となった。田村梨里花の証言、寺本航が尽力して得られた新たな証言者、そして翔太の答弁によって、二人の被告の加害が認められ、翔太の勝訴が決定した。翔太は、加害者の嘘を高井が暴いてくれたことで決着はついてたと語ったが、この時の翔太の表情は完全に晴れやかではない。

この後、正樹は記者クラブでの記者会見に応じることとなった。寺本の協力で得た新たな証言が進行中の裁判の場にメールで飛び込んでくるという高井の手法が目撃され、また八年も前のいじめが裁かれたことにも注目が集まっていた。裁判に踏み切った理由を問われた正樹は、「息子の失われた人生を取り戻してやろうと思いました」と答えている。次々と向けられる質問に答える中で、正樹は自身

の失敗について、「犯人をつきとめ、それは犯罪だと自覚させ、いじめをやめさせる。シンプルなことです、その努力を怠っていた」「その結果、息子の信頼を完全に失ってしまった」と振り返る。そして、答弁の中で翔太が「父親がずっと僕の傍にいてくれた」「僕を見放さなかった」と言ってくれたことで、裁判をして本当によかったと思えたことを吐露して見せた。そして不登校に悩む全国の親御さんに伝えたいことを、と求められ、「子供と一緒に戦ってください」「子供を信じて、お前を守ってやれるのは世界中でお父さんとお母さんだけなんだと言いつけてください」「息子は、自分が悪いわけではなかったと確信を得ました。私たち親子にはそれで十分だったんです」と声を震わせた。

7. おわりに

その後の一家には、大澤家の家屋に正樹と翔太が暮らし、節子が時々訪れるというリズムが出来つつあった。節子からは「翔太の為に、本当にありがとうございました」という謝辞を贈られた。由依は父親の記者会見に心を動かされたと、長いLINEを送ってよこした。彼女は野口の祖父の地盤から、衆院選挙に立候補する決意をしたという。掲げた政策にはいじめ対策の言葉が並ぶ。

判決を聴いた後、何か釈然としないものを遺していた翔太は、父に再起の決意を述べる。裁判に勝ったということで、終わりにできないものを芽生えさせていたことだろう。慰謝料として獲得した百五十万円をリハビリ費用に充てたいと願い出た翔太は、「飛び降りる瞬間、このまま死ぬんだって時にわかったんだ。オレ、生きたことないじゃん、一度もちゃんと生きてないじゃんって。」

崩壊した家族が再生するには、これほどの犠牲が必要なのかと、正樹と翔太の道程を前に胸苦しい思いに見舞われるが、崩壊した家族の多くは散りじりのままになってしまうので、再生の苦しみを知ることはいらないのかもしれない。正樹の繰り返す「自分はそんなにいけなかったのだろうか」という自問には、多くの読者が答えを見出せないのではないだろうか。正樹があのような頑固さ、偏狭さ、横暴さを身につけてしまったのは、彼の生育環境によるもので、時代や社会の影響を受け、それがよしとされる背景の中で育まれたものと言える。肯定できる人間像ではないが、一人の人間として、彼には他の生き方はできなかったのだろう。だが、正樹が正樹なりの限界ぎりぎりまで生きた結果は、妻の節子に死を望ませ、発作的ながら息子を自死に追い詰めた。正樹の中の、頑なに守ろうと固執するもの、彼なりの愛であった家族への支配、そこに家族という集合体に馴染まない誤りがあったのではないだろうか。

この作品は「8050 問題」といういじめ・ひきこもり、そして高齢化を視野に入れた家族問題を扱っているが、DV・介護・貧困など、家族に起こる問題は、閉塞することで深刻化する。閉塞は家族を悪い状態のまま固定させ、抜け出せないことが時に命の危険さえ招いてしまう。人は自由に、心地よく生きなければいけない。そうでなければ、生きていけない。この原則に外れたとき、家庭であれ、学校であれ、取りこぼされる誰かが生じ、一人でも取りこぼされる集団には、どこかにほころびがある。そのことをまざまざと考えさせられる作品といえよう。

参考文献

- [1]黒川祥子『8050 問題 中高年ひきこもり、七つの家族の再生物語』（集英社 令和元年 11 月）
- [2]川北稔『8050 問題の深層 「限界家族」をどう救うか』（NHK 出版新書 596 令和元年 8 月）
- [3]吉見俊哉『平成時代』（岩波新書、令和元年 5 月）

※本文よりの引用は、『小説 8050』（新潮社、令和 3 年 4 月刊）による。